０　序章

３３歳、独身、女。
この条件で、今年の大きな変化といえば、普通は結婚か離婚か妊娠・出産をイメージするだろう。
でも、実際は違う。
在宅介護に直面することになったのだ。
母は６０歳代だが、父は８０歳代という、歳の差カップルに生まれたあたしの宿命なのかもしれない。

最初はちょっと、笑えた。
冗談でやっているのかと思うことさえあった。
でも徐々に、苛立ちや、不安や、そういったものに変わっていき。
それじゃいけない。と気付いてからは
介護って意外と面白いじゃない、と思うようにしてきた。

正直、すべてがそれでは片付かない。
でも。
同じように在宅介護に悩んだり不安になったりしている、様々な方に。
少しでも笑いと共感が届けられたら幸いです。

面白いだけではない本に仕上げていきたいと思いますのでお付き合いください。

１　数年前の追憶～迷子はどっちだ？

ふと、今思い出すと。
予兆は何年か前にあったのです。

父と母とあたしが出かけた、広いショッピングモール。
「お父さん、ちょっとここで待っててね」
あたしが８０を過ぎた父に声をかける。
たぶん、周りは、祖父と孫に見えてただろうな一笑

「買い物してくるから、この椅子で待っててね」

そう言いおいて、母と二人で買い物へ。
父は椅子に座って、物珍しげに周りを見回していた。

３０分ほどして。
父を座らせておいた椅子の所へ戻ってくると。
なんと。
父がいない！

「トイレかなぁ」
のんびりと楽観的に考えたあたしは、母をそこに残して、一応周りを歩いてみる。
「いないねぇ」
「トイレにしては遅くない？」

徐々に不安が増してくる。

探そうにもショッピングモールは広すぎて　全部歩くのは無理。
でも、父は足が既に悪かったので、そんなに遠くに行ったはずはない。
そうは言っても、近くは既に探したのだから、心当たりはない。

「とりあえず、荷物、車においてくる」
そう言って、あたしが駐車場に向かうと。

駐車場の入り口に父が！

「何してるのお父さん、探したよ」

びっくりしたあたしが、声をかけると。
「何だ、朝。こんなところにいたのかー」

もうどっちが迷子で　どっちが探していたのかわかりません笑

「何やってるの」
「いや、うちの車がないから、母さんと朝が先に帰ったんだと思ってタクシーを呼ぼうかと、、、」
「ぇ」

ちなみに車はちゃんと停まっていた。
「あるじゃん」
「そうか？おかしいなぁ」

母もやってきて、３人で大笑いし、車で家に帰ったのですが。

既にこの時、父の認知症は始まっていた、のかもしれないなぁ。と思ったりします。